
MSKプロジェクト

田中タロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MSKプロジェクト

【Nコード】

N1069J

【作者名】

田中タロウ

【あらすじ】

私のパパは本当のパパじゃない!?

ワガママ美少女 美優の小さなミステリーが始まる!

第1話 私のパパ

「ねえ、パパア」

「ダメだ」

「んだよ！まだ何にも言ってるねーだろ！！このクソオヤジ！！！！」

「・・・美優、その二重人格なんとかしろ」

「うっせー！！！！」

その時、パパの携帯がピピピと鳴った。

「はい、間宮です。・・・はい、ええ・・・」

パパは慌てて2階の書斎へ上がって行った。

何よ、自分は携帯3つも持ってるのにさ。

私には、1つも買ってくれないんだ。

こんなに毎日毎日カワイ子ぶって頼んでるのに。

パパには「カワイ子ブリッ子作戦」だけでは通用しないと思い、
ついには、さっきの「不良娘作戦」まで実行しているというのに、
パパは全然携帯を買ってくれない。

リビングを見回す。

そこには絵やら陶器やらが飾られ、大きな革張りのソファとテレビがある。

いわゆる「金持ちの家」ってやつだ。

パパは弁護士だし、ママの実家は大金持ちときてる。
お金なら有り余るほどある。

それなのに、パパは携帯一つも買ってくれない。
お小遣いだって、友達の半分もくれない。

私はわざと、ドスドス！と足音をたてて、
2階の自分の部屋へ入り、ベッドへダイブした。

ふんっ！！！！！！

私、もう中学3年よ！

クラスみんなは、ううん、学校みんなは携帯持ってるのよ！
持っていないのなんて、私だけだわ！

何を今時「携帯は大学生になってからだ」よ！
どんだけ古いの、パパは！？

ママだって「パパがダメって言うんだからダメ」って言って
パパの言いなりだ。

面白くない。

・・・わかってる。

パパは私がかわいくないんだ。

私がパパの本当の子じゃないから。

ベッドから起き上がり、鏡の前に立つ。

自分で言うのも何だけど、
かわいい、と思う。

160センチの身長に、スラッと長い手足。

目はクリッとしていて、よく、子猫みたいって言われる。鼻も高いし、口も程よく大きい。

肩より少し長い髪はクセがなく、キラキラだ。

街を歩いてるとよくスカウトもされる。

(怪しいヤツもあるけど)

全てママ譲り。

パパに似ているところは一つもない。

当たり前か。

血が繋がってないんだから。

ドンドンドン

「おねえーちゃ！おねえーちゃ！」

ドアの外から舌っ足らずな声でした。

私はため息をついてドアを開ける。

「何よ、龍太」

「こえ！こえ、よんで！」

2歳になったばかりの弟の龍太だ。

嫌味なほどパパにそっくり。

プニプニの両手に抱えられているのは、絵本だ。

「いーや！お姉ちゃんは忙しいからパパに読んでもらいな！」

「おねーちゃんが、いいの！」
「うるさい！」

私は思いっきりドアを閉めた。

ドアの向こうで龍太の泣き声がし、
少ししたら下からママが「どうしたの？」と上がってきて龍太を連れて行った。

ああ、イライラする・・・

あれは忘れもしない、小学6年生の夏。

夜中に人の声で目が覚めた。

私は何事かと思い、ベッドから抜け出すと、
忍び足で階段を降りた。

階段の途中まできたところで、リビングから大声が聞こえてきて固まった。

何？今の声、パパ？

どうやらリビングでパパとママが喧嘩しているようだ。
そりゃ、パパとママだって喧嘩くらいする。

でも、これは・・・
今までの喧嘩と全然違う。

二人とも本気で怒っていて、かなりの大声で怒鳴りあってる。

私はその場にしゃがみこんだ。
どうしよう。

聞かない方がいい・・・
でも足が動かなかった。

ママもかなりキっていて、泣きながら怒鳴ってるようだ。
でも・・・パパは・・・

パパのこんな声、聞いたことない。
こんな言葉遣い聞いたことない。

パパはいつも優しい。

ちょっと言葉遣いは悪いけど、それも気になるほどではない。

それが今は、まるで別人だ。

ううん、別人どころの騒ぎじゃない。

なんか・・・不良みたいだ。

その時、ママの叫び声がした。

「なによ！美優はあなたの子じゃないからそんなことが言えるのよ
！！」

え？

なに？

なんて？

あまりの衝撃に自分の耳を疑った。
ママの言葉に対してパパも何か怒鳴り返してたけど、
何を言っているのか、もう私の耳には入ってこなかった。

気がついたらベッドの中にいた。
どうやってここまで戻ってきたのかわからない。

私、パパの子じゃないの？

でも、思い当たることがある。

私は確かにママ似だけど、パパに似ているところが全くない。
いくらママ似だって言っても、少しくらいパパに似てるところがあるはずだ。

でも、全くない。

それに血液型。

パパはA型でママはB型。

そして私は・・・O型だ。

血液型のことってよくわからないけど、
少なくともA型とB型の両親からO型の子供が生まれてくるなんて
考えられない。

私・・・本当にパパの子じゃないんだ。

涙が出てきた。

でも声が漏れないように、布団の中で小さくなって唇をギュツと噛

んだ。

「美優！起きなさい！」

突然ママが部屋に入ってきた、
かと思うと、クローゼットを開け、
私の制服や下着を鞆に詰め込んだ。

「おじいちゃんの家に行くわよ！」

え？

それって・・・

私はあつという間に車に乗せられて、
その日はおじいちゃんの家泊まった。

朝起きたとき、昨日のことは夢だったんじゃないかと思えた。
あんなドラマみたいなこと、ありえない。
でも、おじいちゃんの家で寝ているということは・・・
やっぱり夢じゃないんだ。

不思議なもので、一体何があったのか、
あんな大喧嘩してたくせに、パパとママは次の日にはすっかり仲良
くなっていた。
元々仲がいい夫婦だったけど、なんか前以上にラブラブで、
こっちが恥ずかしくなってしまう。

そして、あの喧嘩から10ヶ月ちよつとたった頃、
龍太が生まれた。

もう・・・勝手にしてよね。

本当は面と向かってパパとママに、

私はパパの子供じゃないの？

誰の子なの？

どうしてパパは私のパパになったの？

って問い詰めたかった。

でも、聞けなかった。

パパとママは幸せそうだし、

龍太が生まれてからも、二人の私に対する態度が変わったわけでもない。

だったら、何も知らないことにして今まで通りしていればいいじゃない。

そう思った。

でも、パパに怒られたり、携帯を買ってもらえなかったりすると、「私はパパの子じゃないから」って方に考えが行ってしまう。

龍太が生まれてからは特に。

龍太はパパが32歳、ママが37歳の時に生まれた。
私が生まれてから13年も経っている。

しかも男の子。

そりゃあ二人とも目に入れても痛くないほどかわいがっている。
龍太が怒られてるのなんて見たことがない。

私にはお小言ばかりなのにな。

だから私にとって、龍太は面白くない存在だ。
ちっともかわいくないし、

ワガママだし、
家も服も汚すし、
うるさいし、

それでいてパパとママに凄くかわいがられてる。

なによ。

おもしろくない！

第2話 橋の下の子

「へい、そのカワイイ彼女！乗ってかない？」

「結構です」

「駅に行くのかい？送ってってやるよ」

「結構です」

「つれないなあ。じゃあ、茶あでもしばこうぜ」

ああ・・・

もう限界。

「あははははっ！！！！」

「ちよつと、美優、笑いすぎ」

車の後部座席の窓から顔を出した夢乃が私を睨む。

「だって・・・夢乃・・・あんた、何時代の人？ってゆーか、どこでそんなの覚えたの？」

「昨日昼に再放送されてたドラマ」

どんなドラマだ。

「ねえ、冗談はともかくさ。乗ってよ。一緒に学校行こ」

「ありがとー、夢乃！助かる！」

私はグレーのブレザーの裾を翻し、大きな黒塗りの車に乗り込むと、夢乃のほっぺにキスをした。

「・・・美優。そのキス癖なんとかしないと、本当に変な男に捕ま

るよ？」

「仕方ないじゃない。パパ譲りよ」

パパは小さい頃外国に住んでたとかで、
どこでも誰にでもキスする癖がある。

結婚してからはママの手前、控えてるようだけど、

私は知ってるんだゾ。

しかも、そんなパパを見てきたせいで、私にまでその癖が移っちゃったし。

平井夢乃は、私と同じ私立堀西学園に小学校から通っている。

堀西は小学校から短大・大学までエスカレーター式になっているお金持ち学校。

当然通っている生徒も、お金持ちばかり。

ちなみにパパもママもこの卒業生だ。

夢乃は、HSホールディングスという会社の社長の娘。

私とは違い、小柄でちょっとふくよかだけど、

可愛い感じの女の子。

そして何より物凄く頭がいい。

もしかしたら堀西の大学には行かず、

もっとレベルの高い大学を受験するのかもしれない。

小学校からずっと仲良しなのに、ちょっと寂しいな……

「美優は相変わらず徒歩通学なんだね」

「……うん」

堀西の生徒はほとんどが車で通学している。
もちろん運転手つきの車だ。

「パパに頼んで、車にしてもらったら？」

「だよ。でも携帯も買ってくれないのに、通学用の車なんて用意してくれる訳ないし」

「お金はあるでしょ」

「お金はあるけどケチなの。私に冷たいの。私、橋の下で拾われた子だから」

夢乃が、あはは、と笑う。

私も一緒に笑う。

あながち嘘じゃないんだけどね。

「でもさ、危ないよ。堀西の制服着てるのって、『私んち、お金持ちなんです！』って

宣伝してるようなもんだよ？誘拐とかされたらどうするの？」

「・・・」

その通りだ。

パパもママも堀西に通ってたんだから、それくらい分かるはずなのに。

やっぱり、私なんてどうでもいいのかな？

「どうでもいい」

「・・・」

「こんな細かい芸当はどうでもいいんだ」

リビングのソファアに座り、パパがジロリと私を見る。

「なんだ、これは？」

「通信簿」

「その通り。よくわかったな」

当たり前でしょ。

私を持って帰ってきたんだから。

「どうしてこう見事にオール2なんだ？狙ったのか？だったらある意味凄いな」

「でしょ？」

「ふざけるな」

ふん、っだ。

「何よ。いっつも『人間、勉強さえできればいいってもんじゃない』とか言ってるくせに」

「別にオール5を取れなんて言っていない。得意な科目とか好きな科目ぐらい頑張れよ。」

「一科目ぐらいあるだろ？」

「保健体育」

「・・・それも2だろ」

「大丈夫よ。2学期は性教育に入るから間違はなく5を取れるわ」

「おー。期待してるぞ」

「任せて」

私はイライラしながら自室へ戻った。
明日から夏休みだって言うのに、台無しな気分だ。
いつものことだけどさ。

パパは堀西高校の卒業生だけど、成績が良かったため、
堀西の大学には行かず外部の大学へ進学した。

しかもあのH大！
よく受かったわね。

司法試験に受かってるんだから、それくらいは朝飯前なのかな？

でも、私は違う。

パパの子じゃないんだから・・・
パパみたいに頭いいわけじゃない。

そこまで考えて・・・思い出した。

ママも頭よかったんだった。

H大とはいかなけど、ママも外部のレベルの高い大学を卒業している。

じゃあ私って遺伝とかの問題じゃなくて、純粹にバカってこと？

もう！ますますイライラする！

こういう時は・・・

私は鞆に服とか化粧品を詰め込み、
勢いよく部屋を飛び出すと階段を走って降りた。

途中、龍太が「あしよんで（遊んで）」とせがんできたけど、
いつも通りスルーした。

「美優！どこにいくの？」

キッチンからママの声がした。

「家出する！！！」

私はそのまま、玄関を突破した。

走ること1分。

後ろを振り返る。

誰も追いかけてこない。

ほら、ね。

「当たり前でしょ」

「・・・」

「月に1回は必ず家出って・・・それってもはや家出じゃないんじゃない？ただの外泊」

「・・・」

「しかも、家から徒歩5分のところじゃねー。誰も心配しないって」
「・・・夢乃。一応私、家出人なんだからもうちょっと温かく迎えてよ」

「ねえ、美優。ケーキどっち食べる？チョコ？チーズ？」

「人の話、聞いている？」

「じゃあ私、チョコ」

「ダメ！私がチョコ！」

家出して5分後。

私は夢乃の部屋にいた。

夢乃の家はマンションの最上階。
いわゆる、ペントハウスってやつだ。

うちは一戸建てで綺麗なお庭が自慢だけど、
やっぱりマンションはいいな！。

設備は最新だし、何より階段がないから上り下りがなくて楽。

「でも、ロビーまで降りてから忘れ物に気づいたときは最悪。
最上階まで取りにいかないとダメだもんね。そういう時に限ってエ
レベーターこないし」

「なるほどねー。私も3歳くらいまではマンションだったらしいん
だけど、

パパが弁護士になったときに今の家買ったんだって」

「へー」

そういうながら、私がお土産、というか、宿泊費代わりに買ってきた
ケーキをつく。

「あ、メールだ」

夢乃が携帯を開く。

「いいなー。携帯」

「お小遣いで勝手に買ったらしいじゃん」

「月1万じゃ買えないよ。買ったとしても通話料払えないし」

「月1万！？何それ！？」

「夢乃っていくら貰ってるの？」

「5万」

5万・・・

まあ、うちの学校の生徒としては「ちよつと多いね」ってくらいだ。それに比べて私は1万。貧民もいいところ。

夢乃の部屋を見回す。

テレビにデスクトップのパソコン、ゲーム機、等々。

私の部屋にはテレビもない。もちろんゲーム機も。

勉強に使うから、かろうじてパソコンは買ってもらったけど、それだってノートパソコンで使い勝手が悪い。

ああ、「橋の下の子」は不幸だわ・・・

第3話 プロジェクト始動!

返信メールを打つ夢乃を、私は羨望の眼差しで見ていた。

「誰からのメール？」

「彼氏」

「ふーん・・・か、彼氏!? 誰!? 聞いてないし!!!」

「へへへー、いいでしょ？」

「ちよっと!どこで知り合ったの? あ、うちの生徒!？」

「秘密」

「なんでよ!？」

「もう少し彼と深い仲になったら教えてあげる」

「・・・携帯も彼氏も持つてるなんて羨ましすぎる」

「並列しないで」

夢乃は携帯を閉じるとベッドに座り、私を見た。

「私は美優のパパが羨ましいけど」

「パパア!? どこが!？」

「かっこいいし、優しいし、若いし。体育祭とか文化祭もちゃんと来てくれるじゃん？」

うちのパパなんて、ハゲだしデブだし、仕事ばっかで全然どこも連れてってくれないし」

「・・・」

確かにパパはスラッとしてるし、見た目悪くはないと思うけど、優しいかどうかは大いに疑問が残る。

「まだ34歳だから若いのは確かね。私、パパが18歳の時の子だ

もん」

「18!?! 高校生!?!」

「ううん。大学1年の時だって。パパが19歳になる3ヶ月くらい前に私が生まれたの」

「へえ。すごいね。じゃあ、デキ婚だよね」

「・・・」

パパとママがデキ婚かどうかなんて考えたことなかったけど、そうだよな、子供でもできなきゃそんなに早く結婚しないよね。

って、あれ? ちょっと待って。

「いや、デキ婚じゃないよ」

「え?」

だって、私、パパの子じゃないもん。

え? じゃあどうしてパパは18なんかで私のパパになろうと思ったの?

私が一人で考え込んでると、

さすがに勘の鋭い夢乃がつっこんできた。

「何か事情でもあったのかな?」

「うーん・・・」

誰にも話したことないけど、夢乃にならいいか。

「実はさ、私、パパの子じゃないらしいんだ」

「ゲッ。何、その重い話題。でも面白そう」

面白そうって・・・

夢乃はちよっと考えてから言った。

「でも、それで納得した。美優のママってパパより5つ年上でしょ？
ってことは、美優のママは23歳の時に美優を産んでたけど、パパ
と出会ったのは、
そのもつとずっと後なんだよ、きっと」

「え？」

「例えばパパが22歳、ママが27歳、美優が4歳の時に二人は出
会い結婚した、とか。

22歳くらいだったら、子連れの人と結婚してもいいかなーって思
えるかもしれない」

「ううん、それはない」

「どうして？」

「写真があるもの」

「写真？」

そう。写真。

パパとお腹の大きなママの写真。

それに私が生まれた日に3人で写っている写真。

どれも二人とも幸せそうな顔をしてる。

「なるほど。ってことは、美優のパパは、別の男の子供を妊娠して
ると知っていてママと結婚したか、

ママがパパに『あなたの子を妊娠したの』とか嘘言って引っ掛けて、
後からパパに事実がばれた、か。

どっちなだね」

「確かに。でも後者じゃないと思う」

あの大喧嘩の日。

ママの「美優はあなたの子じゃないから」という発言の後、
パパが何を言ったかは、私は聞いてなかったけど、
なんとなく、ずっと昔からパパは事実を知っているような感じだった。

それに・・・

ママは綺麗なお嬢様で計算高いところはあるけど、
そういう嘘はつかない、と、思う。

夢乃は目を輝かせた。

「ってことは、美優のパパは、ママが別の男の子供を妊娠してるって知っていながら、

結婚して美優を自分の子として育ててきたって訳か」

「・・・」

「すごいねー！ますます尊敬しちゃう！18歳でそこまで覚悟できないよ、普通」

確かにその通りだけど・・・

どうしてパパはそこまで思い切れたんだろう？

「そりゃあ、それだけママのことを好きだったんじゃない？

今でも美優のご両親って、新婚みたいに仲良しよね」

「まあね。娘としては恥ずかしいけど」

「いいことじゃないー。いつまでも新婚みたいな夫婦・・・いいなあ、憧れちゃう」

外から見れば、そんなもんなかな。

私はほんと、恥ずかしい。

「ところで、美優は自分の本当のパパって知ってるの？」

「知らない。てゆーか、私がパパの子じゃないって知ってるって、パパもママも知らないし」

「・・・本当のパパが誰か知りたくない？」

うわ！夢乃のこの目は危険だ！

好奇心でキラキラ輝いてる！

「知りたくないって言えば嘘になるけどそこまで知りたいとも・・・」

「何言ってるの！もしかしたらどこぞの王様かもしれないのに！」

そんなバカな。

「よし！MSKプロジェクト始動！」

「MSKプロジェクト？」

「美優出生解明プロジェクト、略してMSKプロジェクト」

「日本放送協会、略してNHK、並ね」

「よろしく、美優エージェント」

「・・・夢乃は何するのよ」

「私は司令塔に決まってるじゃない。ちなみに本部はここ」
「・・・」

「じゃ、早速調査を開始してね」

「何したらいいのよ？」

まさかパパかママに面と向かって聞く訳にはいかない。

それができるなら、とづくにしてるし。

「そうねえ・・・さしあたり、おじいちゃんとおばあちゃんにそれとなく聞く、とか」

「なるほど。でも『それとなく』ってどうやるの？」

「そこは美優エージェントの腕の見せ所よ！」

こうして、よくわからないままMSKプロジェクトは開始された。
私としては、携帯獲得作戦の方を実行したいのだけど・・・。

第4話 ミステリー？

どうせ夏休みでヒマだ。

もちろん宿題があるけど、

そんなものは8月末に徹夜でやるためにあるようなものだし。

「まずは、間宮のおじいちゃんのところに行ってみよう」

間宮のおじいちゃん・・・これはパパのお父さんのことじゃない。
パパは養子なのだ。

旧姓は本城幸太。

ママこと間宮愛と結婚して間宮幸太になった。

だから間宮はママの実家で、
間宮財閥という代々続く大金持ちだ。

私の家から電車で30分。

まさに「大邸宅」の名に相応しいおじいちゃんの家についた。

「美優じゃないか。久しぶりだな。どうした？お小遣いか？」

「うん。肩揉みしにきた」

「ははは、頼むよ」

おじいちゃんはロッキングチェアに腰かけた。

私はおじいちゃんの後ろに周り、肩を揉む。

トントンって叩くだけじゃなくて、ちゃんと揉んであげるのだ。

「そういえば、友達のお姉さんが結婚してもうすぐ子供が生まれる

んだー」

「そうなのか」

嘘。ごめんね、おじいちゃん。

「ねえ、私が赤ちゃんの頃ってどんな赤ちゃんだった？ かわいかった？」

夢乃と頑張って考えた作戦は、
取りあえず私が赤ちゃんの時の話を聞こう、
というものだ。

まさか「美優の本当の父親は・・・」なんてことをいきなり話し出して
してくれるとは思わないけど、
何か手がかりになるような話が出るかもしれない。

「美優が赤ちゃんの頃？」

おじいちゃんの顔が曇る。
お。何かあるの？

「知らんのだよ」

「え？」

「愛からな、いきなり『妊娠したから結婚する』と電話があって、
しかも相手は大学入ったての18歳だと言うじゃないか。

さすがに頭にきてな、それから2年近く勘当状態だったんだ」
「・・・」

「結婚を許したのは、幸太君が司法試験に受かった後だから・・・
美優が1歳ちょっとの時だな。おじいちゃんはその時初めて美優に
会ったんだ」

そういえば、パパとママの結婚式は私が1歳の時に挙げたようだ。かわいい白いドレスを着た私を抱っこしたタキシード姿のパパと、ウエディングドレス姿のママの写真がある。

とにかく、おじいちゃんの話によれば、

ママはおじいちゃんに、私のことをパパの子供として紹介したわけだ。

ということは、間宮のおじいちゃんは何も知らないってこと。なーんだ。

お小遣いをちゃっかりもらって、その足で今度はパパの実家に向かった。

ママの実家からは1時間くらいかな。

パパの実家の本城家は弁護士事務所をしていて、

当然パパもここで働いている。

おじいちゃんが一応所長だけど、

今では本人はあまり仕事はせず、隠居状態だ。

だから、私は事務所へは行かずおじいちゃんの家に行った。

すると、玄関から女性が出てきた。

「あ。和歌さん、こんにちは」

「あら、美優ちゃん。こんにちは。お小遣いもらいにきたの？」

和歌さんがニツコリ微笑む。

背は高くないけど、細くて知的美人、という雰囲気的女性。

長い黒髪がとても綺麗だ。

和歌さんは、パパのお兄さんである真弥さんの奥さん。

真弥さんはパパより10歳も上なので、今44歳。

和歌さんは38歳。

でも子供がいらないせいか、二人とも見た目も中身もとても若々しいので、

私は「おじさん、おばさん」とは呼ばず、名前で呼んでいる。

真弥さんは教師だけど、和歌さんは弁護士で、
やっぱりおじいちゃんの弁護士事務所の弁護士さんだ。

「おじいちゃんに用事だったんですか？」

「ええ。ちよつと仕事でご相談したいことがあって。でももう済んだわ」

それじゃ、と和歌さんは笑顔で事務所の方へ去っていった。

かっこいい・・・。

和歌さんは私の憧れの女性だ。

物凄いキャリアウーマンでいつも颯爽としているけど嫌味がなくつて、

とっても優しい。

私もいつか、こんな女性になりたいな・・・。

「美優か。小遣いせびりにきたのか？」

「・・・」

会う人、会う人、どうして同じことを言うのよ。
お小遣いはついでよ、ついで・・・。

今日はいくまでもMSKの為にきたんだから！
・・・そりゃ、貰えるものは貰うけどネ。

肩を揉みながら、
間宮のおじいちゃんに言ったのと同じ嘘つく。

「美優が生まれた頃？」

「うん」

「知らんのだよ」

また？

私って、どれだけ寂しい誕生だったのよ。

「幸太とはずっと勘当状態だったから」

またまたソレですか。

「18歳で子供ができたんじゃ、やっぱりそうなるのね」

「ん？違うぞ、それは」

「え？」

「美優・・・幸太から何も聞いてないのか？」

「何も、って？」

「幸太と勘当状態になったのは、もっと前からだよ。」

幸太は中学2年の時に家出してな。それから結婚するまでずっと、
ほとんど連絡を取っていなかった」

「ええ！？」

何それ！？

中学2年・・・ってことは、13か14歳？

パパがママと結婚式を挙げたのは20歳のときだから、

7、8年も家に帰ってなかったの？

「家出って、どうして？」

「おじいちゃんも、昔は若くてな・・・真弥に、弁護士になって家を継げ、と

ずつとうるさく言っていた。でも真弥は弁護士にはならず教師になった。

それ以来、おじいちゃんは幸太に、『真弥の代わりにうちを継げ』としつこく言っただ。

その時幸太はまだ中学生だったのにな。

結局、そんな重圧に耐えれず、幸太は家を出たんだ」

「・・・でも、中学2年生で家出して、それからどうしてたの？」

「・・・うん・・・さあな。結婚する時に数年ぶりに連絡をよこしてきたが、

その時にはもう司法試験にも受かった。

だけど、うちを継ぐつもりで弁護士を目指した訳じゃないようだ。

それは今も変わらない。事務所は和歌さんに継いでもらう」

「そうなの！？」

これには驚いた。

だって、おじいちゃんの実の息子であるパパではなく、真弥さんの奥さんである和歌さんが事務所を継ぐなんて。

いや、和歌さんならじゅうぶん過ぎるくらいできたお嫁さんだから、何も問題はないし、私も賛成だけど・・・

じゃあ、パパはなんの為に弁護士になったんだろう。

「さあな・・・おじいちゃんにもわからん」

おじいちゃんてば、わかりやすいんだから。

きつと、おじいちゃんは、

パパが家出した後どこで何をしていたかも、
どうして弁護士になったのかも、

知っている。

知ってるけど何故だか私に教えたくないのだ。

ま、いいや。

これはMSKとは関係ない（なんだかすっかりMSKが板について
やった・・・）。

直接パパに聞けばいい。

もしかしたら、MSKにも繋がるかもしれないし。

私は、これまたちゃっかりお小遣いをせしめ、

玄関を出ると、さつき和歌さんが歩いていったのと同じ方向へ歩き
出した。

それにしても、図らずもパパの秘密が次々と出てきた。

これはおもしろいゾ。

夢乃に報告したら、大喜びだろうな。

それに、昔から私が疑問に思ってたことが一つ解決した。

パパがどうして間宮家の養子になったかだ。

パパは次男坊だし、ママは一人っ子だから、

そうなのもおかしくないんだけど、

パパのお兄さんである真弥さんは、

パパが中学1年の時に教師になり、家を継がないことはもう決まっ
てた。

だから当然次男であるパパが継ぐはずだし、

実際パパは弁護士になった。
なのに、間宮家の養子。

これがずっと疑問だった。

でも本城のおじいちゃんの話で解決した。

パパも真弥さんと同じく、家を継ぐ気はなかった。

だから家出して、ずっとおじいちゃんとは勘当状態だった。

そして真弥さんが弁護士の和歌さんと結婚したから、

和歌さんが事務所を継ぐことになった。

もともと、和歌さんが弁護士になる前に真弥さんと出会ったのか、
弁護士になってから出会ったのかは、わからないけど。

そしてパパは家を継ぐのとは違う目的の為に弁護士になった。

これが新たな疑問だ。

パパは家を出てから、どこで何をしていたのか？
どうして弁護士になったか？

わお。

なんかちよつと、ミステリアスな感じになってきたじゃない？

第5話 廣野家訪問

「弁護士の間宮をお願いします」

「間宮・・・ですか？」

「はい。私、娘の間宮美優です」

おじいちゃんの事務所の受付に座っている、
ちよつと頭が足りなさそうな受付嬢に、
パパの呼び出しを頼んだ。

もう6時だ。

家でパパの帰りを待って、聞いてもいいけど、
おじいちゃんの家と事務所は目と鼻の先。

もしかしたらパパと一緒に帰れるかもしれないし。

ここから駅までの間に、かわいいお店があるんだよね。

パパにさりげなく、「このスカートが欲しいんだ」とか言えば、
もしかしたら買ってくれるかもしれない。

パパは携帯は買ってくれないし、お小遣いはちよつとしかくれない
けど、

こういう時は、なぜか「ま、いっか」と言って買ってくれる。

お小遣いを両方のおじいちゃんから貰うときながら、
このセコイ思考回路。

我ながら情けないけど、きっと将来役に立つはず！

そういう訳で、わざわざ事務所まで来たのに、
この受付嬢は一向に要領を得ない様子。

「間宮・・・弁護士」

としきりに首を傾げてる。

おいおい。

苗字は違うけど、ここの所長の息子だぞ？

それとも、「間宮」って弁護士がいっぱいいるとか？

そんなに普通な苗字とも思わないけど。

「あの。本城所長の息子なんですけど」

と私が言うのと、

受付嬢は見る見るうちに青くなり、

「失礼しました。少々お待ちください」

と言って、椅子からガタガタ立ち上がり、奥へ走っていった。

・・・もうちょっとマシな対応はできないのだろうか・・・

待つこと5分。

ようやく戻ってきた。

「先ほどは大変失礼しました。間宮弁護士は大きな顧客の顧問弁護士をしております、

普段からそちらの方で仕事をしています。事務所の方にはあまり出勤しておりません」

なるほど、それでこの受付嬢は「間宮」と言われてもピンとこなかった訳か。

でも、所長の息子のこどくらい知つていてよ。

今日もその「大きな顧客」の所へ行っているということだった。

昨日、家出(?)をして夢乃の家に一泊したし、

今日はもうそろそろ帰ったほうがいいかな。

パパのことは家で聞けばいいや。

「大きな顧客ってどこなんですか？」

別にそこまで押しかけに行こうと思ったわけじゃないし、

聞く理由もないんだけど、何となく訊ねてみた。

すると、受付嬢は何故かボソボソと、

「そ、そういうことは秘密でして・・・」

守秘義務がありまして、と言ってほしいところね。

「娘にも言えないんですか？」

「はあ」

はい、って言ってー！

本城法律事務所の入り口の顔なのよ、あなたは！

受付嬢のこの頼りない態度にイライラした私は、

どうでもいいことなのに、パパの行き先を意地でも聞こうと思った。

「緊急を要するんです！一刻を争うんです！何かあったら、あなた、責任取れるの!？」

「!!!!」

受付嬢は青くなると、パソコンを見ながらメモに住所と電話番号と最寄駅の名前を書いた。

「あ、あの、こちらになります」

守秘義務はどうした。

「ありがとう」

私はメモを受け取ると、さっさと事務所を後にした。

家へ帰る電車の中。

あーあ・・・

なんか一日中、移動に肩揉み、極めつけにあの受付嬢で、
なんだか疲れちゃった。

私はなんとなく貰ったメモを見た。

あれ？

この「大きな顧客」とやらの最寄り駅って、次の駅じゃない？

・・・どうしよう、行ってみようかな？

でも、もう6時半になるし、お腹も空いたし、ママも心配してるかも・・・

って、私、どうもパパみたいに思い切った家出はできないみたい。
血は繋がってないし、当然か。

でも、私のこの家出癖はパパに育てられたせいよね、
そう、ちよつとくらい遅くなったって、パパが悪いんだ。

一人で勝手に責任転換して、私は次の駅で降りた。

さあ、住所も分かつてることだし、サクッと行きますかー！

で、この「10番地の9」ってどこ？

そうよね、住所がわかってるからって、そこに歩いて辿り着けるわけがない。

カーナビじゃあるまし。

私は「この辺のことならなんでも知ってます」的な駅員さんをつまえて、

メモを見せた。

「すみません、ここに行きたいんですけど。この・・・」

ん？

よくみたら、このメモに書かれてる名前って、会社じゃないみたい。個人の名前だ。

てことは、資産家か何かかな？

「この、廣野さん、ってお宅なんですけど」

「・・・廣野？」

駅員さんの顔が曇る。

メモを見て住所を確認すると、更に曇る。

もしかして、この辺じゃ有名な金持ちの偏屈爺さんとかなのかな？

犬を何十匹も飼ってたり、夜中に騒音を出したり・・・とか。

「君、ここに何しにいくんだい？」

どーでもいいでしょ、と思いながら一応説明する。

「父がここで働いているんで会いに行くだけです」

「え・・・」

そう言ったきり、駅員さんはたっぷり30秒は固まった。

「あのお」

「あ、ああ。改札出て真っ直ぐ行ったら、壁にぶつかるから。その壁沿いにずっと歩いていくと門があるよ。そこだから」

駅員さんはいかにも、もう関わりたくありません、という感じで超簡単な説明すると、さっさと逃げて行った。

なによ、なによ。

パパはこの廣野って人とは別に関係ないんだから。ただの雇われ弁護士よ。

文句を言いつつ、私は説明された通り、道を急ぐ。

それにしても、「壁にぶつかる」って、何それ、

と思って歩いていると、本当にぶつかった。

これ？この右にも左にも延々と続く土壁？

これが個人の家の塀な訳？

それなら確かに、この壁沿いにずっと歩けば、いつかは入り口があるんだろうけど・・・

右から攻めるべきか、左から攻めるべきか・・・
これを間違うと、とんでもない時間のロスだ。
それほどに広い。

私は「どちらにしようかな、天の神様の言う通り」って奴をやった
結果、
右回りを選んだ。

歩くこと20分。
右回りが正解だったのかどうか、もはやわからないけど、
とにかく門にたどり着いた。

黒くて大きな鉄の門。

こんなものがどうして個人宅に必要なんだろう？
そう思いながら門に近づいた・・・けど、そのままスルーした。
なぜなら。

門の前に門番らしき男達が5人。

それは360度、どの角度から見ても間違いなくヤクザさん達だった。

第6話 危機

「ヤクザ!？」

「しー! 声が大きい!」

私は部屋でコードレスホンに向かって人差し指を当てた。

あれから私はドキドキする心臓を押さえ、
家まで大急ぎで帰ってきた。

だって、パパがヤクザの家で働いてるなんて!!
信じられない!!!

「じゃあ、美優のパパは、ヤクザの顧問弁護士やってること?」
「・・・みたい」

「すごいね。でも仕事だから仕方ないんじゃないの? そういうの担当する弁護士も必要でしょ。」

ほら、警察の中にも○暴とかいるじゃん?」

・・・確かに。

そう言われればそうだ。

「そうよね。別にパパがヤクザな訳じゃないもんね」

「そうだよ。むしろそんな仕事してるなんて、度胸がある証拠」
なるほど。

夢乃に言われると、納得できちゃう。

「それで、そのヤクザってどんなところなの?」

「インターネットで調べて見たんだけどね。関東じゃかなり大きな

組織みたい。

組長1人に幹部が20人位。その下に上層部が100人位いて、更にその子分が、

数百人、だって。でも、その子分の子分・・・みたいなのはもうカウントできないみたい」

「へー」

「で、私が今日行ったところは組長の家で、そこに50人くらいのヤクザが住んでるんだって」

「ヤクザの総本家ってやつね」

「うん。パパってば毎日あんなところで仕事してるんだなあ」

「抗争とかあったら巻き込まれるんじゃない？」

「ええー？でも、パパは一般人だよ？そんなに巻き込まれて死んだら労災扱いになるのかな？」

「事務所から特別見舞金くらい出るんじゃない？」

と、まあ話はヤクザなんて非現実なところからお金という現実的なところへ移行して行った。

「あれ？パパは？」

「今日はお仕事で遅くなるって」

お茶碗にご飯をよそいながら、ママが答える。

ママの隣には、ハンバーグをグチャグチャにしながら口へ運ぶ龍太。

「龍太。汚い」

「美優、龍太はまだお箸もろくに使えないんだから仕方ないでしょ」

「・・・ママもパパも龍太には甘いんだから」

「龍太に甘いんじゃないかって、小さい子に甘いのよ」

ママは龍太の口をガーゼでぬぐった。
なによ、私がちょっと肘ついて食べただけで滅茶苦茶怒るのに。

またイライラしながら食後にテレビを見ると、
龍太がソースだらけの服で近づいてきた。

「おねーちゃっ！あしよんで！」
「いや」

「あしよんで！」

「ママに遊んでもらいな」

「おねーちゃっがいい！」

「ダメ！」

「うう・・・うわああああん」

ああ、もう！

うるさい！！！！

「美優！ちょっとは龍太と遊んであげなさい」

「いやよ！私、子供って嫌いなんだもん！」

「龍太は弟でしょ！」

「わあーーーーーん！！！！」

私はパパの子じゃないもん！

と、いう言葉をかろうじて飲み込んで、
走って部屋へ行った。

龍太のせいでその日はずっとイライラが治まらず、
パパに昔のことを聞きそびれた。

翌日からパパは忙しいらしく、あまり家にいなかったので、調査は進まず、自分の出生や、パパの昔の謎に対する興味も薄れて行った。

ところが。

8月に入ったある夜のこと。

夜中にふと目が覚めた。

虫の知らせ・・・

とかではなく、今日また夕食中に龍太が私に近寄ってきたから、「汚い！」と言って部屋へ逃げ帰り、満足に食べれなかったのだ。要は、単にお腹がすいただけ。

台所で冷蔵庫の中を物色し、太るなーと思いながらチョコを食べて、2階へ戻った。

・・・あれ？パパの書斎の電気が点いてるみたい。ドアの下から光が漏れている。

パパが夜遅くまで仕事してるなんて珍しくもないけど、「パパの仕事」と言えば、例のヤクザ関係に違いない。

そう思うと、少し興味が沸いてきて、なんとなく書斎のドアに近づいた。

すると、意外なことに中から声が聞こえた。

一瞬、パパとママがラブシーンでも演じてたらどうしよう！
と思ったけど（それはそれで覗いてみたいけど）、
どうやら声の主はパパと・・・本城のおじいちゃん？のようだった。

もちろんおじいちゃんもたまにうちに来るけど、こんな夜中に、しかもパパの書斎に来るなんて初めてだ、と思う。

私は息を押し殺してドアに耳をあてた。中から、途切れ途切れに声が聞こえる。

「H S ホールディングスが・・・」

「契約を打ち切られる・・・」

「やばいな・・・」

「でも廣野の方の・・・」

「このままだと倒産する・・・」

倒産!?

倒産って、おじいちゃんの事務所が!?

私はまた足音を忍ばして部屋へ戻り、ベッドにもぐりこんだ。

落ち着いて、落ち着いて・・・

二人の会話を繋げると、

どうやらH S ホールディングスという会社が、おじいちゃんの事務所との契約を切ろうとしている。

その会社は事務所にとっては大きな顧客らしく、そこに手を引かれると事務所は経営難に陥り、

倒産に追い込まれる・・・ようだ。

ちょっと待って。

「廣野の方の・・・」とも言っていた。

それに・・・

HSホールディングスって、どこかで聞いたことある。

どこだっけ。

HSホールディングス・・・「H」・・・ヒライ・・・平井！

平井夢乃！！！！

そうだ！夢乃のお父さんの会社じゃない！！

待って！待ってよ！

ってことは、夢乃がお父さんに、私のパパがヤクザの仕事をしているってコトを話したんだ！

ヤクザの仕事をしている弁護士事務所なんて信用ならない、とか思った夢乃のお父さんは、

おじいちゃんの事務所と契約を切ろうとしている。

それで、「廣野の方の」という言葉が出てきたんだ！！！！

この考えの細かいところは間違ってるかもしれない。

でも、夢乃のお父さんが廣野組と事務所の関係を知って、事務所との契約を打ち切ろうとしているのは

確かだ。

夢乃も別に悪気があった訳じゃないだろう。

ただいつもの会話の中で、思わず話してしまったただけだろう。

でも・・・

どうしよう・・・

私のせい、
だよ？

第7話 組長？との対面

翌日、私は再び廣野というヤクザの家へ向かった。

昨日の夜、まだ15歳に満たない私が、
必死に考えた解決方法。

それは廣野組の組長さんに何とかしてもらおう！
ということ。

HSホールディングスがおじいちゃんの事務所との契約を切ること
に関して、

廣野組は何か悪いことをしたわけじゃない。

でも、パパが廣野組で仕事をしていることが問題だ。

じゃあ、パパが廣野組で仕事をしなければいい。

きつとパパは自分から廣野組の組長さんに「ここの仕事を辞めたい」
とは

言えないだろう。

ヤクザとは言え、おじいちゃんの事務所のお客さんには変わらない。

だったら、組長さんの方から辞めるように言ってもらえばいい。

もしくは・・・

あわよくば、だけど・・・

廣野組がおじいちゃんの事務所を助けてくれる、とか。

今、廣野組から顧問料をいくらもらってるか知らないけど、HSホールディングスくらい払ってくれば、おじいちゃんの事務所は倒産しなくてすむはず。

とにかく組長さんに、おじいちゃんの事務所の窮状を知ってもらおう。

そう心に決めて、私は廣野組の門の前に・・・
正確には、門から100メートルほど離れた電柱の影にいた。

今日も、以前とは違う門番が5人。

「こんにちはー。こちらで仕事している弁護士の間宮の娘ですけど、組長さんに会わせてください」と言っ
て、「どうぞ、どうぞー」と入れてもらえるとはとても思えない。

ここに私が来たことはパパには秘密にしたいし。
どうしたものか。

そうだ。

これくらい大きな家なら、門は一つじゃないかもしれない。
うちだって、キッチンに勝手口がある。

そういう裏口なら入りやすい。

私は鉄の門の前をやりすごし、壁沿いに家の周りを回り始めた。

どれくらい歩いたか。
既に日は暮れ・・・

とまでは行かないけど、30分近くは歩いたと思う。

ようやく、裏口らしい引き戸を発見!!

そうそう、こういうの!

こういうのを探してたのよ!

まさに、サブちゃんが入りしているサザエさん家の裏口って感じ。

軽くノックしてみる。

・・・返事なし。

そうだね。この裏口は壁にある。

この奥に庭か通路かを挟んで家があるわけだから、

この裏口をノックしても、家の中に聞こえるわけじゃない。

戸を引いてみる。

・・・開かない。

そうだね。鍵かけてるよね。

仕方ない。

ここで待つか。

でもあまり待つ必要はなかった。

数分もすると、引き戸が静かに開き、

中から40代くらいの男の人が出てきた。

幸いなことに正門の門番のような、いかにも「ヤクザやっています!」
って感じの人ではなく、

どちらかというと、「会社で部長やっています」って感じの人。

薄いグレーのTシャツにジーパン、それに革のサンダル。

すごく優しいそう、とは言わないけど、穏やかな顔つきをしている。

もちろん、この家から出てきたということは、ヤクザさんなんだろうけど、

門番の人たちより遥かに声をかけやすい。

それに、こんな裏口から出てくるんだから、そんな大物でもないだろう。

私は安心して、その人に声をかけようとしたけど、

その人は、私に背を向けるとスタスタと歩いていってしまった。

ちょ、ちょっと待ってよ！

私は慌てて後を追いかけた。

でも、もしかしたら何か急用があるのかもしれない。

• だけどこの人を逃したら、もうあの家に入るチャンスはないかも・

こうして私はよくわからないうちに、その人を尾行していた。

20メートルくらい離れて、コソコソと。

でもその人は全く私の尾行なんかには気づかず、

後ろを一度も振り向かないままコンビニに入り、煙草を買うと、

コンビニを後にして再び家に向かって歩き出した。

なーんだ。コンビニに行くだけだったのかあ。

私は思い切って、その人が引き戸に手を掛ける前に声をかけた。いや、かけようとした時、その人が振り向いた。

「なんだ、お前？ さっきからなんで俺の後をつけている？」

「えっ・・・」

気づいてたのね・・・
しかも、やっぱりちょっと怖いかも・・・

「あの、わたしこちらに用事があるんですけど」
「ここがどこかわかってるのか？」

「廣野組の組長さんのお家ですよ？私、組長さんにお話があるんです」

私がそう言うと、その人は目を見開いた。

「組長なんかに簡単に会えると思ってるのか？」
「・・・無理ですか、やっぱり・・・」

だけどその人は愉快そうに笑い出した。

「ははは、変な奴だな。まあいい、取りあえず入れ」
「いいんですか！？」
「さっさとしろ」
「はい！」

話がわかるじゃない！
やっぱりこの人に声をかけてよかった！！！！

ところが。
裏口に入り、通路を挟んだところにある家の勝手口の前で、
その人は木戸に耳を当てた。

「・・・何してるんですか？」
「敵がいるか確認してる」
「・・・」

この人、本当にこの組の人なの？
私、騙されてるんじゃない・・・

「よし。誰もいないようだな」

そう言って、その人は木戸を開け、私を促して中へ入った。
中は台所のようだ。

その人は靴を脱ぐと、左右をキョロキョロ見回した。
まだ「敵」とやらいないか確認してるみたいだ。
・・・大丈夫かな。

「おかえりなさいませ」

どこに潜伏していたのか、女性が一人、流しの前に立っていた。
長い黒髪の、物静かな感じの女性だ。
歳はたぶん、この男の人くらいかな。

「み、美月・・・。お前、なんでそんなに気配を消すのが上手いんだ」

「そんなことしていません」

美月、と言われた女性はツンツという感じで言い返す。
なんか、怒ってませんか？

「また、煙草ですか？」

「・・・」

「若い頃は禁煙なさってたのに。奥様が出て行かれてから、また吸い始められてしまって・・・」

美月さんは「奥様」のところを強調した。
男の人は美月さんをキッと睨んだ。

「そのことは言うな！お前、最近ちょっと態度がデカイぞ！」

「出て行かれた奥様の代わりに、組長の体調管理をするのも女中の役目ですから」

「く、組長！？」

私は声を上げた。

ええ！？

この人が組長！？

「み、見えない・・・」

思わず本音を漏らすと、美月さんが小さく笑った。

「正直な方ですね。組長、そちらの方は？」

「コータの娘の間宮美優だ。俺に用事があるらしい」

バレてーら。

「あら。これは失礼いたしました。私、ここで女中をしております
美月と申します」

「あ。間宮美優です・・・」

美月さんは深々とお辞儀をしてくれた。
私も慌ててお辞儀する。

「はい」

美月さんのお小言ですっかり機嫌を損ねた組長さんは、そっけなく私に言った。

組長さんの後について、長い長い廊下を歩く。

今日は歩いてばかりだな。

しかも同じ家の周りや中を。

どれだけ広いんだろう。

さすがヒロ野組。

それにしても、

こんなに長い廊下を歩いていると、沈黙の時間も長い。

・・・何か話したほうがいいかな？

「あの・・・組長さんて、奥さんに逃げられたんですか？」

組長さんが足を止め、ギロツと睨む。

「お前、さすがアイツの娘だけあって、遠慮をしらんな」

「はあ、まあ」

血は繋がってませんけどね。

育てたのはパパですから。

「どうして私のこと知ってたんですか？」

「組員の家族のことくらいは知っている」

「組員？」

「コータのことだ。お前の父親だろ」

そう。

パパは間宮幸太。

でも、組員て何？

「パパはこの弁護士、ですよね？」

「ん？違うぞ？」

「え」

「いや、弁護士は弁護士だ。役に立ってくれている。

だが、コータは昔からずっとうちの組員だ。途中で弁護士になっただけだ」

「・・・」

「知らなかったのか？」

「・・・」

「なんだ、コータの奴、自分のことを娘にも話してないのか」

組長さんは襖を開けると、「入れ」と言った。

第8話 パパの秘密

「それで、話ってのはなんだ？」

「えーっと、なんでしたっけ？」

「・・・・・・」

パパがここの組員。

つまり、ここのヤクザ。

そう聞かされて、私の頭は軽くパニック状態。

自分が何をしにここに来たのか、一瞬にして忘れてしまった。

「あの、そんなことより、」

「・・・・」

「ヤクザの組長さんって、一人でフラフラとコンビニなんて行っているんですか？」

「・・・・」

「しかも、あの女の人に怒られてるし」

「・・・・」

「煙草、体に悪いですよ？」

「・・・・お前は、俺に説教しにきたのか？」

「違いますよ。それで、パパがここのヤクザって、本当ですか？」

組長さんは呆れながらも私のあっちこっち飛びまくる質問に答えてくれた。

「ああ」

「いつからですか？」

「コータがここに来たのは、確か中学2年の時だったな」

中学2年!?
それって・・・

「パパは家出してここに住んでたんですか？」

「そうだ。お前の母親と暮らすようになるまでずっとここにいた」

あら。

パパの謎が一気に解明された。

パパは家出してこのヤクザの家にいた。

弁護士になったのは、この組で働いたためだろう。

数年前のパパとママの大喧嘩を思い出す。

あの時のパパは、いつものパパじゃなかった。

そう。

あの時私は、パパのことを「不良みたいだ」と思った。
それは間違ってたかったんだ。

「・・・」

「ショックか？」

ショック？

ショックはショックだけど・・・

「うーん。なんか面白いかも」

「面白い？」

「パパなんて、どこにでもいるフツートのパパだと思ってたけど、ヤクザだなんてちょっと面白いです」

「・・・」

「だって、普通のサラリーマンの父親より、警察官とか消防士の父親の方が、
なんかカッコイイじゃないですか」

「弁護士だって、普通のサラリーマンじゃないだろ。」

それに警察官とヤクザを並べるな。どっちにも失礼だ」

それもそうね。

でも、「パパがヤクザ」なんてちよつと面白いじゃない？

しかも「ヤクザやってる弁護士」なんて。

逆かな？「弁護士やってるヤクザ」？

生活に実害がなければ、それもアリでしょ。

・・・いや、実害があるんだった。

「ここに何しにきたか、思い出しました！」

「・・・」

私は、

自分のせいで、HSホールディングスの社長が、おじいちゃんの事務所と廣野組が関係あることを知り、

契約を切ろうとしていること、

もし契約を切られれば、事務所は倒産するかもしれないこと、
を組長さんに説明した。

「ふーん、なるほどな」

「はい。それで・・・あの、なんとかしてほしいんです・・・」

パパがここのヤクザである以上、

パパとここが関係を切ることは難しいだろう。

じゃあ、組長さんに助けてもらおうしかない。

組長さんはニヤツと笑った。

「それにしても、父親の為にこんなところに一人で乗り込むとは随分と父親思いじゃないか」

「・・・そんなんじゃないやしません。元はと言えば私が友達にこのことを話したのが原因だし、

事務所が潰れたら、うちも生活できなくなるし」

「コータに金を出してるのはうちだ。事務所じゃない。あそこにはコータは籍を置いてるだけだ。

だから事務所が潰れてもお前の家は生活に困ることはないと思うけどな」

「え？　そうなんですか？」

「・・・お前。コータは廣野組の幹部だぞ？　いくら貰ってると思ってるんだ」

幹部？

そういえばインターネットには、数百人も組員がいる廣野組の幹部は20人位だけと書いてあった。

パパはその中の一人なの！？

うわ、実はパパって凄い人？

「コータは19歳で司法試験に受かって、22歳で弁護士になったんだ。

それ以来、ずっとうちのトラブル解決に当たってくれているんだ」

「へえー」

「世間的に見てもじゅうぶんエリートだ。かなり若い頃に幹部にした」

「へえー」

「で、お前の話は終わりか？」
「へえ」

おっと。

「はい。あの・・・どうでしょうか？」

「うん。まあ、コータの実家だからな。仕方ない、少し調べてみよう」

「本当ですか！？ありがとうございます！！」

「何かあったら連絡する。携帯の番号を教えろ」

「・・・持っていないです・・・」

「持っていない？お前、何歳だ？」

「中学3年です」

「今時珍しいな」

「そうなんです！パパに、私に携帯買うように言って下さい！！！！」

組長さんは、また愉快そうに笑うと、私に言った。

「携帯のことはともかく、来週の水曜いここに来い。その日はコータもいない。

門番の奴らに、組長に呼ばれたと言えば、取り次いでもらえるようにしておく」

「ありがとうございます！」

こうして私は意気揚々と廣野組を後にした。

第9話 いないいない、ばあ

「美優、何ジロジロ見てるんだ」

「べーつーにー」

「おねだり、でもなさそうだな。気持ち悪いぞ」

「失礼ね」

廣野家へ行つて以来、

私の、パパを見る目が変わった。

私の態度は変わらないけど。

へえー。

このパパが、ヤクザ、ねえ。

どこからどう見ても、普通のオジサンだと思うけど。

それを言うならあの組長さんもそうだな。

ここ数日、いつもに増してパパは忙しそうだ。

そりゃ実家の事務所が倒産の危機ともなれば、

いくら自分達の生活には関係ないとは言え、放っておくわけにはいかないよね。

ふふふ。

大丈夫よ、パパ。

組長さんがなんとかしてくれるから。

「なんだ、そのイタチ目は」

「パパ。今のうちに私にお礼を準備しといた方がいいわよ」

「何のお礼だ？2学期に保健体育で5を取るお礼か？」

「それもあるわね」

「まったく・・・誰に似たのか・・・」

「こーゆーところはパパよ」

そう。パパの教育の賜物よ。

「おねーちゃっ！あしよんでえ」

また龍太が接近してきた。

「いや」

「あしよんでえ」

「いやだって」

「美優。遊んでやれよ」

「パパが遊んでやればいいでしょ？」

「龍太はお姉ちゃんと遊びたいんだよな？」

「うん」

龍太は満面の笑みで頷く。

・・・この子は。

私は龍太が生まれた時、すでに中学1年で、

なんの面白味もない新生児に全く興味がなかった。

笑いもせず、ただ泣くかオッパイ飲んでるかウンチしてるか、ただだもん。

それに、こんな歳の離れた兄弟、恥ずかしい。

そしてこの2年、私はロクに龍太に構ってこなかった。
一緒に遊んだこともないし、
一緒に出かけたこともないし、
一緒にお風呂に入ったこともない。

それなのに、どうしてこんなに私と遊びたがるんだろう？
「いや」って言われるのわからないのかな？
もはや理解不能な宇宙人だ。

「おねーちゃ、こえ、よんで」
「・・・龍太、その絵本好きよね。いつもそれ持ってくるもん」
「うん。ちゅき」
「・・・」

ついに私は根負けして、龍太を膝に乗せて絵本を開いた。
「いない いない ばあ」という絵本。
動物が「いない、いないー」と顔を隠しているページがあり、
次のページで、その動物が「ばあ」と言って顔を見せるというもの。
ひたすらその繰り返し。
何が面白いの？

「いない、いないー」
「キャッキャッ！」
「ばあ」
「きゃあー！」
「いない、いないー」
「きゃー！」
「ばあ」

「きゃああああー！」

龍太はもう大ハッスル。

どこに喜ぶ要素があるのかサッパリわからない。

「美優もその絵本、大好きだったな」

「え！？嘘！？こんなのが！？」

「ああ。いっつもこの絵本持ち歩いて、好きあらば俺に『よんでー！』ってねだってたぞ」

「・・・覚えてない」

「せいぜい3歳までだったからな」

信じられない。

「こんな絵本のどこが好きだったのかしら？」

「絵本は、小さな子供にとっては内容よりも、好きな人の声を聞くのが楽しいんだ。

父親とか母親の声で、何かを読んでもらう。それが大事なんだよ」

「・・・ふーん」

「内容を理解できるようになるのは、もう少し大きくなってからだなー。

だから、この『いない いない ばあ』はよくできてると思うよ。

ストーリーも何もないけど、子供の好きな動物が顔を隠したり、見せたり・・・

しかも親の声も聞ける。小さい子供にとっては最高の絵本なんじゃないか？」

「・・・」

「だから、もうちょっと抑揚をつけたり、大きな動物だったら声を低くしたり、

小さな動物だったら声を高くしたりして、工夫して読んでやれよ」

「・・・」

パパはどうしてこんなに絵本に詳しいんだろう？

答えは簡単。

私の記憶にはないけど、私に絵本を読んでもくれてたからだ。

きっとパパも最初は「こんなのどこが面白いんだろう？」と思っ
てたに違いない。

でも私が喜ぶから、読む。

読んでいるうちに、「あ、こういう読み方したら、もっと喜ぶな」
というのがわかってくる。

そうやって、上手に絵本を読めるようになってくるんだ。

確かに、パパとママが龍太に絵本を読んだときの声はすごく優し
いし、

聞いててこっちが恥ずかしくなるくらいオーバーに読んだりする。

でも龍太はそれが楽しいらしく、狂喜乱舞してる。

親っていうのは、何をしたら子供が喜ぶのかを
つねに手探りで探しているのかもしれない。

じゃあ、どうしてパパは、絶対に私が喜ぶ携帯を買ってくれないん
だろう？

私がパパの子じゃないから？

・・・そうじゃない気がする。

だって、パパは私に絵本を読んでもくれていた。
だけど携帯は買ってくれない。

何が違うんだろう？

絵本を最後まで読み終わると、

（ひたすら「いない、いない」「ばあ」を繰り返してただけだけど）
龍太が「もいっかい」とせがんできた。

ストーリーがあるものならともかく、

こんなんじゃ、読んでもこっちがつまらない。

自然と、なんとか1回目とは違うことをしようとする。

「龍太、最初の動物はなんだっけ？」

「にゃんにゃん」

「そうねー。いない、いないー」

「きゃあ！」

「ばあ！」

「うきやあ！」

猿みたい。

「次の動物は？」

「わんわん」

「本当？いない、いないー」

「うううー！」

「ばあ！」

「くまちゃんだったあ」

「そうねー。次は？」

「みつきーまうちゅ」

「ミツキーマウス！？あははは！」

ネズミだから間違っていないけど、

このネズミを見てミツキーマウスを連想するの！？

面白いなあ、子供の思考回路って。

結局、ヤクザのことなんてすっかり忘れて、
ひたすら「いない、いない」「ばあ」でこの夜は更けていった。

第10話 勘違い

「おねーちゃ！こえー！」

「また！？」

あの夜以来、龍太は今までに増して私に絵本の催促をするようになった。

しかも、いつもあの「いない いない ばあ」。

しまったなー。

一度甘い顔をしたのが間違いだった。

しかも私は夏休みで朝から晩まで家にいるから、

龍太は2歳児とは思えないほど虎視眈々と私のスキを狙ってる。

今も、トイレから出た瞬間につかまった。

「お姉ちゃんは、もうそれ飽きた」

「こえー！」

「全く・・・」

ここで折れないと龍太は泣き叫んで転げまわる。

うるさい上に、ママから「龍太をいじめないの！」とお小言が飛んでくるんだから

たまったもんじゃない。

そういう訳で今日も朝から「いない いない ばあ」だ。

もう、何ページにどの動物が出てきて、どんな表情をしているかもすっかり覚えてしまった。

それにしても、この絵本の動物って・・・

なんて言うか、ちょっとシュールなんだよね。
リアルでもコミカルでもなく。
でもなぜか龍太はこの絵が大好きなようだ。

5回読んだところで、私は立ち上がった。

「龍太、今日はお姉ちゃんはとーっても大切な用事があるからこれ
でしまい」

「やー！」

「あら、美優。でかけるの？珍しい。家出？」

「・・・デートよ」

「まあ。誰と？」

「40代の素敵なオジサマ」

「じゃあバッグの一つでも買ってもらいなさいね。女は安売りしち
やダメよ」

「・・・・・・・・」

あの夫にしてこの妻あり、か。

私はポロシャツとハーフパンツに着替えると家を出た。

ちなみに足元はスニーカー。

あんまりこんな格好はしないけど、

（ママからも、「そんな格好でデートなんてありえない！」とクレ
ームが来た）

今日はあの廣野家に行くのだ。

組長さんのことを信用していない訳じゃないけど、
場所が場所だけに、何もないとも限らない。

一応すぐに逃げ出せるよう、こういう格好にした。

電車一本でわずか10分。

こんな近くにヤクザの家があるなんて今まで知らなかった。
きっとパパが今の家を買うとき、

廣野家に通いやすいように場所を選んだんだろうけど、
あえて私を廣野家の近くには連れて行かなかったんだろう。

でもどうしてだろ？

自分がヤクザって私に隠しときたかったのかな？

パパってそんなこと気にしなさそうだけど。

何か他に理由でもあるのかな？

あ、もしかして危ないから？

実は私が、記憶もないくらい小さい頃に危険な目にあってるのか？

まさかね。

そんなことを考えてるうちに、
あっという間に廣野家に着いた。

今日も怖そうな門番のお兄さん達がうろちよろ。

夢乃に事情を話して一緒に来たほうがよかったかな・・・
でも、夢乃には、あれ以来連絡していない。

夢乃を責めるつもりはないし、
夢乃がお父さんに廣野組のことを話したため、
こんな状況になってしまったということ
夢乃に教えたくなかった。

きつと夢乃は気に病むから。
全て解決してから、笑い話で終わらせよう。

門番の人に、「組長に呼ばれて来たんですけど」
とだけ言うと、すぐに中に通してくれた。

そこには見事な日本庭園が広がり、
ちょっとした公園並みだ。

散策してみたいところだけど、さすがにそうとは言えない。

私は前回と同じ広間に通された。

「来たか」

「あ。組長さん、こんにちは。禁煙してますか？」

「うるさい」

組長さんが腰を下ろしたので、私も座る。

「お前。コートとコートの父親の会話をどう聞いてたんだ？」

「え？」

「何か、早とちりしてないか？」

「ええ？」

何？何か間違ってた？

「確かに本城弁護士事務所とHSホールディングスは契約関係にある。

しかし、HSホールディングスの顧問料など大したことはない。
契約を切られても、本城法律事務所は潰れたりしないぞ」

「へ？」

「倒産の危機にあるのは、本城法律事務所じゃなくて、HSホールディングスの方だ」

「・・・」

「不渡りを出したらしい。それで本城法律事務所に顧問料も支払えなくなる可能性があるから、契約を打ち切ろうとしたようだ」

「・・・」

「つまり、お前が心配するようなことは何もない、ってことだ」
「ええー!？」

「・・・どうしてそう、おっちょこちよいなんだ、お前」

あの夜の、おじいちゃんとパパの会話を思い出す。

『HSホールディングスが・・・』

『契約を打ち切られる・・・』

『やばいな・・・』

『でも廣野の方の・・・』

『このままだと倒産する・・・』

あああああ！

「やばいな」「倒産する」はHSホールディングスのことを言っていたのか!!!!

「で、でも、パパが『廣野の方が』って言っていました！」

「お前はコータが卒業した堀西に通ってるのか？」

「え？はい」

「HSホールディングスの平井社長の一人娘も堀西だな？」

「・・・はい」

「コータが、廣野組の仕事そっちのけで、裏で随分動いたようだ。」

HSホールディングスはもう倒産の危機を脱した。

どうやら、お前の友達の親の会社だからコータは無償で助けたようだな」

「・・・」

会社が倒産したら、夢乃はとてもしゃないけど堀西には通えない。だからパパはHSホールディングスを助けてくれたの？

「うちの組の奴が、ちょっとしくじって廣野組もここのところ大変だったんだ。」

だからコータは『廣野の方の仕事も忙しい』とでも言いたかったんじゃないか」

「・・・」

なんだ・・・

そうだったんだ・・・

私が心配することなかったんだ・・・

私は脱力し、木の大きなテーブルに突っ伏した。

第11話 アイツ

ヘナヘナと崩れた私を見て、組長さんはため息をついた。

「その一人で勝手に突っ走るところもアイツにそっくりだな」

アイツ・・・

「組長さん。私、パパの子じゃないんです」

「何？」

「昔、パパとママが喧嘩してるときに、ママが私のことパパの子供じゃないって、言っていました」

「・・・そうなのか」

「はい。確かに、血液型も、パパはAでママはBなのに私はOなんです」

「・・・」

組長さんは顎に手を当てて考えこんだ。

「・・・まあ、お前の親がそう言うんだったらそうなんだろう」

「はい。パパが携帯買ってくれないのも、きっと私がパパの子じゃないからなんです」

すると組長さんは、ニヤツと笑った。

「携帯を買ってくれない」

「はい」

「小遣いも少ない？」

「はい」

「通学も徒歩？」

「・・・はい。っえ？どうして知ってるんですか？」

「俺もコータをそうやって育てたからだ」

「・・・」

組長さんはとても楽しそうだ。

「コータがここに来た時、俺はまだ25だった。

でも、コータは俺の責任で拾ってきたからな。俺が面倒みないといけなかった」

「組長さんが拾ったんですか」

「ああ。夜に一人で街をフラフラ歩いてたから、面白い奴だと思っ
てな」

パパらしくないなあ。

・・・ううん、パパらしい、かな？

「まだ中学2年のコータをどうやって育てようかと、若い俺なりに
考えた。

金はいくらでもあるから、金だけ渡して『好きにやれ』と言うのも
アリだったが、
それじゃコータはちゃんとしたヤクザになれないと思った」

「ちゃんとしたヤクザとちゃんとしてないヤクザってあるんですか」

「『これは堅気の世界では常識で、あれは非常識』、とちゃんと分
かってないと、

立派なヤクザにはなれない」

「立派なヤクザ」が堅気の世界で友好的に見られるかどうかは別だ
けどね。

「で、結局俺は、コータをそれまで通り堀西には通わせたが、通学は徒歩、携帯もなし、小遣いは月1万、と決めた」

私と一緒に。

「昼飯代は別に渡したが、それも月5千円くらいだった」

「5千円！？・・・毎日500円だとしても、全然足りないじゃないですか！」

「コータがそれでいいと言ったんだ。足りない分は小遣いから出してみたいだな」

「・・・厳しいですね」

「俺はコータをいじめたくてそうしてた訳じゃない。コータのことを想ってたからこそだ。」

「どうでもいい奴なら、金だけいくらでも渡して、適当にやらせてたさ」

「・・・」

「だからコータは物の相場観をきちんと持ってたし、どうしても金が足りない時は、自分が甘えてるのを自覚した上で年上の組員に、金を借りたりしてた。」

「そういうことが、今のコータを作ったと俺は思ってる」

確かに、夢乃を含め、クラスの友達はお金に対する関心が薄い。

「お金なんてあって当たり前で、「やりくりする」ってことを知らない。」

「親のクレジットカードを持ってる子なんて尚更だ。」

「ノート一冊でもカードで買うから、そのノートの値段も知らないし、高いのか安いのかも分かってない。」

「そのあたり、私は主婦並にうるさい。」

「ママはお嬢様育ちでどちらかといえば「相場観ない組」だけど、

高い買い物をしたときは、必ずパパに「コレをいくらで買った」と報告している。

パパは文句は言わないけど、代わりに私が「高すぎ!!」とつつこんだりする。

だから、おじいちゃんの事務所が倒産するかも、と思ったとき本気で焦った。

「・・・」

「ま、お前にもそのうち親心が分かるさ。だがその前に、お前はアイツ譲りの暴走癖を治せ」

「だから、私、パパと血は繋がってませんから」

私がそう言うのと組長さんは不思議そうな顔をした。

「俺が『アイツ』と言ったのはコータのことじゃない。愛のことだ」

「え？ママ？」

「ああ。お前は中身も愛にそっくりだが、見た目は本当に愛そのままだな。」

だから先週、お前がここに来たときも、すぐに間宮美優だとわかった」

組長さん、そんなによくママのこと知ってるの？

そりゃ、組員であるパパの奥さんだから当然かもしれないけど・・・でも、なんでだろう。

それだけじゃない気がする。

その時、組長さんがふと微笑んだ。

あれ？

この目元。

どこかで見たことがある。

どこだっけ・・・

思い出せない。

「暴走癖と言えば」

「はい？」

「A型とB型の親からもO型の子供は生まれるぞ」

「・・・」

「生物くらいちゃんと勉強しておけ」

「・・・・・・」

穴があつたら入りたい、ていう言葉はこういう時に使うのね。
と、その時！

「美優！？」

「ん？ コータ。お前、何でここにいる？」

「パパ・・・」

なんと廊下からパパが顔を出したのだ。

「お前、今日はここに来ないはずじゃなかったのか？」

「昨日、若い奴が警官を殴ったって連絡が来て。って、美優！お前、
なんでここに・・・！」

「これから組長さんとデートなの」

「はあ!？」

「いいでしょ？ 組長さん」

「ああ。構わん」

「俺が構います!!!!!」

「うるさいなあ、パパは。行きましょ」

「そうだな。携帯でも買ってやるか」

「うわ！組長さん、大好き！！」

私は背伸びして、組長さんのほっぺにキスをした。

こうして、私と組長さんは、

呆然とするパパを残して家を出ていった。

ふふん。いい気分！

第12話 私のパパ!?

「ジャーン！」

「よかったね！ついに携帯、買ってもらえたんだ」

「ふふふ、パパと違って組長さんは理解がある！」

『コータの頃とは時代が違うからな。友達との関係を考えても、携帯くらい持っていた方がいいだろう』だって！」

さすがのパパも、

組長さんが私に携帯を買ったとなると、許さない訳にはいかなかった。

甘いんだから・・・とかブツブツ言ってたけど、無視無視！

早速、夢乃の家に携帯を持って遊びに行き、番号とアドレスを教えているところだ。

「そういえば、夢乃。夢乃のお父さんにパパが廣野組で働いてるって言った？」

「え？どうして？そんな話、する訳ないじゃん」

「・・・だよね・・・ごめんね、夢乃」

「何が？」

「なんでもない」

そうだよね。

友達の秘密を親に簡単に言ったりしないよね。

結局夢乃には、パパがHSホールディングスを助けた話や、パパが廣野組の組員だという話はしていない。

私が再び廣野家を訪れた理由も、

「パパが働いているところをどうしても見たかったから押しかけた」という、少々無理のある説明で押し切った。

ちなみに。

組長さんに携帯を買ってもらって帰った日、当然パパからは「どうして廣野家にいた！？どうして俺があそこで働いてると知ってる！？」と、詰問された。

「夏休みだしさー。パパにお弁当作って事務所に持って行ったら、受付の人が、パパは廣野さんちに在るって教えてくれたの」

「そんなこと、天地がひっくり返ってもある訳ないだろ」

「そんなこと、って？」

「美優が俺に弁当作る、ってことだ」

「本当よ」

「じゃあ、何を入れたんだ？サルモネラ菌か？O－157か？」

「私の愛情」

「破壊力抜群だな」

どーゆー意味よ。

「それより、事務所のアノ受付の人。なんとかした方がいいわよ」

「亜矢ちゃんか。お前もそう思うか？顔はかわいいんだけどなー・・・」

「顔もあれくらいならどこにでもいるでしょ。守秘義務とか接客マナーとか知らないの？」

「うーん・・・。って、どうせ廣野家のことはお前が強引に聞き出したんだろ」

「あら。私がそんなことする訳、ないじゃない」

「お前だからしそうなんだ」

「失礼ねー」

とまあ、こちらもなんとか押し切った。

「ねえ、美優。夏休み宿題してる？」

夢乃が携帯をいじりながら、聞いてきた。

「してる訳ないじゃん。MSKで手一杯だったもん」

「なんだっけ、それ？」

「夢乃・・・あんた、頭いいのに時々物凄いボケをかますよね」

「あはは。冗談だって。で？そっちは進んでるの？」

「全然。どうでもよくなってきた。それより今は宿題に忙しい」

「さつき、してないって言ったじゃん」

「自由研究だけやってるんだ」

「げ？あの普通一番最後にやるやつ？何のテーマでやってるの？」

『ヤクザの生態系について』とか？あ、この際『私の出生について』とかどう？」

「それアリ？そんな身売りしたくないし」

「じゃあ、何をやってんの？」

えへん、と私は胸を張った。

「絵本と子供の心の繋がりについて」

「・・・偉く真面目ね」

「ちようにどいい実験台が身近にいるからさ。簡単に終わらせようと

思って」

龍太お気に入り「いない　いない　ばあ」。
パパの言う通り、確かに子供にはいいかもしれない。
でも、とにかくストーリーがなさすぎる。

インターネットで調べてみると、対象年齢は0歳から1歳くらいまでとのこと。

そうだね、そんな感じの絵本だね。

龍太はもう2歳。

もちろん、「いない　いない　ばあ」を読んじゃいけない訳じゃないし、

龍太みたいにちよつと大きくなっても「いない　いない　ばあ」を愛読してる子供は多いらしい。

だけど、そろそろ進歩してもいいんじゃない？

そう思って、こないだ「かぐや姫」を読んでやってみた。

でも全然ダメ。

話が長いので龍太はすぐに飽きて、読み終わらないうちに次のページへ行こうとする。

ストーリーも全然理解してない。

竹が光る絵とかには異常に興奮してたけど。

やっぱりまだストーリーより絵とか声が大事か。

図書館であれこれセレクトし、龍太に試してみると、

「大きなカブ」が好評だった。

大きく成長したカブをおじいさんが抜こうとするけど抜けず、おばあさんが手伝う。でも抜けない。

動物達も次々と手伝いにきて、最後によりやく抜ける、という話だ。

これならストーリーもあるし、「みんなで力を合わせることの大切さ」みたいな教訓もある。

話も短いし、絵もおもしろいし、

「うんとこしょ、どっこいしょ」という掛け声も、龍太には嬉しいらしい。

そういう訳で、今では毎日「うんとこしょ、どっこいしょ」だ。

数日前まで「いない いない ばあ」だけだったのに、なんか急成長したような感じ。

子供っておもしろい。

龍太は私だけじゃなく、

パパとママにも「大きなカブ」を読むようにせがむので、

二人とも龍太の相手で手一杯。

私なんて100%放置プレイだ。

でも、それも前ほど悪くない。

だけど、もちろん、中学生の私の関心は絵本に留まらない。

「美優、見て、これ！」

「マスカラ？どこのブランド？聞いたことないなあ」

「ママがイギリス旅行のお土産に買ってきてくれたの。すっごくいいよ！試す？」

「いいの！？貸してー！」

私はマスカラと一緒に大きな目の手鏡とビューラーを借りて、早速まつげをカールする。

拡大鏡を見ながら、念入りに・・・

あれ？

私のこの目元・・・

どこかで見たことがある。

ママ？

違う。

ママも私と一緒にクリツとした目をしてるけど、どちらかと言えば、少し下がった目尻をしてる。

でも私は・・・

いつの間にこんな目尻になったんだろう？
少しキュッと上がって、凛々しい感じだ。

そう。これは・・・

組長さん？

「ふふふ」

「どうしたの、美優。急に笑い出して」

「ううん。なんでもない」

やるじゃん、ママ。

私、将来、大物になるかも、ね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1069j/>

MSKプロジェクト

2010年10月8日12時07分発行